



伊地知文庫
文庫20
310
1





古今和歌集西度聞書卷第一

伊地知氏書冊

種玉庵

宗法師

なまや奇は人の心とをぬぐてし海川のまじり
こぼれがれりては 此後和奇の大意がれ

なまや奇は此國の名なり奇は此國の風なり
此國と名まやと名付る事ハ伊時徳伊時冊
書ありてより流いて山海草木人倫と生也
流いて後の國家とわいて水土木算
かた人か山より此とすゑて山と道とよるゆへ
山の通とよ義ありて号とよるがかり山ありとの
ありしと略しえらるがかり海の字よりわのひきき
ありとればはわの字より人より心時とよ

古今和歌集

わし弁といふやうふ心と扱へし又山とて中
りしやうといふまゝかゝる流かり山通の義より通
せり山は玉成の義かりあり流うれわつて高
といふ是一切成就根元かり又いふくやま
と弁といふより扱がきりて流うく義わり
大いふり対する大りわつていふへしなりと
りしとてふ和と大と扱はことごとくともふ
二神陰陽の和合なりしとてかまは義かり盡
乾坤一切の物なりしとてふ和かり和弁は
又云大の三國よとてふ大ともは天竺梵字と漢
字よ字一漢字と和字りりのつたなり

和字の奇として改羅屋の心漢字は流とて
あるは十七字の和字とてふもふとの合する事
はみちれ異意かりなるやのこは山通の義
とてかこしと大和の流とてへし流一遊し
用かり

人れの流とてをひりして 物に在る志
心りわつては心ふりありかり世界は流
とてふ事ふりやうありかり世界とて義は
相對し世界より流の心よりありかり心
ふりありとて義よりありと弁といふありた
とて天地の義流とて力小流ありとて

人れんを推くもるやふ天竺用一なりま
らふ一氣起て葦荊れととと家取かり
天竺七代とあるとまへ一切美物の根元の家と
ありて人の心を推くもるやふ根元う
一念ももれ来て世始むと日よる根元
とよふさかりも人の心かり
よ海川のよとの数とよかれもる 物くふ徳
とくかふる心かり一二と生し二カ物と生ふ
らぬり

世中ふある人とのまけり物かれんよなふ
事とみる物く物よけりていひ出さるかり

一辰かり美名序ふ人れ在世不能せ為思意易
遷くはんかり世為天道かり人れ世と成て
味をかり黑白を別せ来も君臣父子朋友の
みりもてあつりかへもやう事か一行任
程計みふにかりあつりわんかよれりか
わりあはきはん物や物うけていひ出さかり
苑うかへういひも水ふとむいひのよとま
まはたさやうけり物いほさう奇とよあむらる
一辰かり物よ流しあつりやれて奇と流し
人倫のみりあつりあつり中れういひと水底
の柱もみかへし理かり詩心義日表樂の起

一首の奇と詠するも天地と胸中よりうき
よとれども是理なり

目より見ぬれは神とてあはれこなりし後

鬼神とは貫つれ詠なり幽るいんは詠なり
神心かち奇と詠するよ心の感動するすれ
もち鬼神と教とたもなするれは道なり
今て邪とすと云ふゆ仁とまのいしとくる
西をゆくへて鬼神と感せしむらりし理
の義が利と照太神位吉玉は清木の擁護
ある道なれは感應ある事勿湯が利
あ神も同神化現とせたりしはとたり又

徳神とんれ外よ出うも畢竟一心乃よと
んかろえうも又伊佐國は鬼の人と損する
事わりし時 出も本と我大君の國なれは
いほく鬼神するもかろえんさやよふんてとる
るにまらりといつる事もわ利

杯と女の中にもるも 二神のあつらふよ
り始とそそのまらりたがろえん又事知の
あ後とそとがりとま

まけりさとのぬれんをさかきさびらひ奇なり
かほく死のむが君のいりりと果女の一首とて
をうけとる事かなやわえんは事

武士とは千丈と帯と袴とのよからず
ふ強情かろとまり和奇の胸中のよのぬ
をやまうらうかり矢裏よ刀どくせいの
みふふの武士かろ一毛理に以上奇の誼

此奇あめらひひりてまるとる所内よむ
あり 一辰かりまよあつる奇のむりかり天
地開闢二部の和るまうらう事一と奇とま
誼と

あすのう紀をこれ下
誼とるおをかりは古誼よはいて説あり二
系れ家母は貴之誼とむ月かりくりい

とんだめふは誼をすく母れ内侍よあそ
ときと柳太義の誼よ 山さうわくまそ
けうれおらうくも月あふ世にと貴之の時代
相をまやえ説ありは奇の年益盛作の後撰
者かり御志貴之村上義平まそとる一と
并と誼せらがる一は時益盛若年かろくれ
とと道下りかか奇かろれおれおれかろれ
山樞の奇清法家の化かり古誼は公但つ
は奇の清法家の家とて益盛よらうと續古今
るも二系家のと一は貴之と別あめらゆへ
公但つのみやうは事ととかりて不測之為

古今昔一
家門明教抄母も費之れ古はかり山櫻井舟巻
盛とまは是電かろく一ははとたはと号す
事はははもはは記し古今のははかり一はは
とまは又いおははとも別かり

め神お神とかりははる事をもとる舟かり 二神

せしめとくよかんま一ははとかり
意哉遇可羨妙男妻 陽神先唱白

意哉遇可羨妙女妻 日本記

あうわまゆも世にははる事いふこのありあり
舟とてはは娘とく一とまは 一辰かりとる
あまことと二神の舟いあまことと大直

あてふれ心なごられい下ては娘のうたとの坊
きとるかり

久これあめあての 神代の事なれともいあり
ゆととて下照娘の舟とせとかり下てる娘
乃舟

あまならもとと織女の子あまは玉れみまもあ
あまなりとるまもはにあててははとあまはと記を
かひの祿

あてては娘の 天照大神の皇孫と下してこの
國のまはせんともとと雅奏と使とて下
活ひし下照娘と契とかりてまおるり

治平とては井ノ夫やありてう坊治いぬも
後下照姫あきつるひめと味雅あらしきのいひ孫天雅あまのつひ乃裴も
の阿えんよりありての奇なる味雅あらしき乃裴も
かめ治いぬありて味雅あらしき乃裴もの事ことなり
焉かののれ孫まごあり

とてあつはりてかあつとよあ家 そのうち
畏谷おろたうはりてかあつとよあ家
よ記しるなりとてふこはまのれ孫まごありい
きうぬこもか記しるあり

えいしと奇あまなりとて 夷曲えいしなりひあ奇あまとてふ
ふかり月神つきかみのたれえり討たとれいひ夷えいは

えいしとてあ家いぬなりとてあ家いぬのれ奇あまなりとて
地祇あま神かみなれ夷曲えいしとてなり

あつなりとてあ家いぬなりとてあ家いぬのれ奇あまなりとて
なかり下照姫あきつるひめの奇あまもたれ文字あざなも不ふ奇あまの
事ことなりとていひ

わの孫まごのほらありていひとてあ家いぬのれ奇あまなりとて
いひとて地神あまの奇あまの事ことなりとていひ
奇あまの事ことなり

ちとやあ家いぬなりとてあ家いぬのれ奇あまなりとて
とてあ家いぬのれ奇あまの事ことなりとていひ
孫まご下照姫あきつるひめの奇あまの事ことなりとていひ

此事古語に「（こゝろ）」とありてそのもとを皇統よめり

と云ふはよき事なり

されど一してあはれむらうかありき

と云ふ一して一なりわらうかかなくあつるを

今世とかわしてはと云ふは昔のよりみそり一あま

戸ひとりのふらりきり 今世と云ては昔の

みよとくかげつふ世昔の三十一字派と初づ

て人の世れ并の是なりしはくはくはくはくは

又八雲と川の奇しやと云ふも三十一字の奇

ありしと云ふ流わり組不分明なり

すまのあれたんあはれおとてらおかん林のこのかきか

このことばは一廿二男とてと云ふは昔の

もむとをむとことと云ふは一と云ふは

後よすかり 古語拾遺并 日本記日神月神

天照大神と云ふは又云ふは又云ふは

ふられはと云ふは又云ふは又云ふは

女とすはと云ふは又云ふは又云ふは

は國と云ふは又云ふは又云ふは

すはと云ふは又云ふは又云ふは

たはと云ふは又云ふは又云ふは

たはと云ふは又云ふは又云ふは

と云ふは又云ふは又云ふは

感^びのまゝと流^して流^れたりと人^の感^ん
して流^すの^の例^は元^來の^の國^は
まゝに世^のの^の相^違ひ^はあり
時^はも^も相^違ひ^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は

又^も流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は

又^も流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は
流^すの^のま^はり^はあり^しる^時も^も又^は

て未成しての弁此根元とてなる妙なり白妙
 を神代の弁なりとて又なる所にて五行よま
 なるなり意妙上右の弁とてとてその
 ふもわらうらうなり始終妙は弁と始なり
 て万代不窮なり不可改後の爰なりは
 弁なり清濁の口伝わりとてのよわり八重
 徳のなりとて下なるののりといは二才
 の濁へ下地上下は清濁とてなるなり
 爰為るは包圍なり配なり治て地神なり
 ことごとくも日神の在りたる天地けをる神
 めくまへとてなり日神と和し治て後の

事かればなり此のの弁なりとて三十一字と
 月有る事とは爰なりは弁神道家ありは
 伝るる系物黄門と伝爰に治なりは弁なり
 と濁りなるは神の弁は心得なりとて
 爰なり

明てそ死とてなりとてなりとてなりとてなり
 一伝なりと素爰為るは二十一字詠なりと
 の道万端とてなりとてなりとてなりとてなり
 地開なりとてなりとてなりとてなり
 鳥とてなりとてなりとてなりとてなり

ものしほふも及仁徳の徳なるりき
つと王仁といふ言蘇人れ仁徳といふは
あつる舟かき 王仁は日本^{わくに}の文^{ぶん}道^{みち}の師^しれ
たのうり^りのころ^{ころ}應^お神^{しん}の^の西^{さい}河^が東^{とう}朝^{てう}せ^せの^のや
仁^に徳^{とく}の^の師^しを^をう^うけ^けり^りや^や 吳^い人^{じん}和^わ舟^{しゆ}と^とも
て^てい^いさ^さめ^めp^p事^じ跡^{せき}の^の理^りか^かり^りは^は國^{くに}に^に治^ちま^ま
ま^まん^ん才^{さい}を^をば^ば國^{くに}よ^よ來^きp^pと^とい^いふ^ふる^るハ^ハ國^{くに}の
凡^はく^くい^いふ^ふ義^ぎあり^りの^の山^{さん}の^の初^{はつ}は^はは^はは
か^かる^る一^いつ^つ
よ^よも^もと^とた^たて^てい^いて^て 今^{いま}も^もか^かる^るは^はは^はは
あ^あい^いわ^わか^かれ^れん^んか^かる^る一^いつ^つ

は死に梅とて一 は死にきり其の死にうわ
吳^い阮^{げん}か^かり^り明^{めい}教^{きやう}抄^{しやう}や^やは^は阮^{げん}き^きん^んは^は河^がの^の舟^{ふね}
雜^{さい}波^はは^はや^やの^の花^{はな}を^をこ^こり^りと^とも^もい^いふ^ふと^と嘆^{なげ}や^やは^は死^し
か^かみ^みは^はは^はは^はは^は美^{うつく}民^{しん}れ^れわ^わり^りする^す所^{ところ}の^の才^{さい}一^いつ^つは^は
先^{まづ}も^もう^うい^いふ^ふま^まと^とい^いふ^ふ河^がの^の舟^{ふね}か^かり^り冬^{ふゆ}こ
り^りと^とは^は仁^に徳^{とく}の^の雜^{さい}波^はを^をこ^こり^りと^とい^いふ^ふは^はし^しく^くて
位^ゐも^もは^は治^ちま^まる^るに^に冬^{ふゆ}の^の空^{から}初^{はつ}か^かり^りう^うら^らの^の舟^{ふね}
子^こと^とは^はを^をこ^こり^りた^た人^{ひと}なる^るとい^いふ^ふは^はし^しく^くて^て
其^{その}の^のま^まや^やか^かる^る理^りか^かり^り仁^に徳^{とく}の^の世^よと^とあり^りは^はは^は
河^がか^かり^りさ^さう^うや^やは^は死^しと^とは^は世^よと^となり^りし^し後^{のち}て^てか^かれ
凡^はと^とた^たる^る百^{ひやく}姓^{せい}の^のう^うま^まと^とを^をと^とり^りえ^えま^まる^る

うさうあのと兼らう祢女たりあれたるあゝとて
うさうあのと兼らう祢女たりあれたるあゝとて

うさうあのと兼らう祢女たりあれたるあゝとて

かほくふれたがきりし 橘法元事 陸奥の國守あ

りたれとれとあやかりぬ事なきあゝとて

王と下されたるに國司と為そふありたれ

とていへくたれいさる阿宋女のうらけり

て能子よ水と入て玉のいさごとそと起てい奇

と詠てがさるるあり 万葉一と也

あさう山新入んゆら山の井れあゝい人ともあつた

い奇ととあつたあり井れいけいあゝと

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

き水母は物のいけいけいけい事なりとこれい

縁わり奇れ父母のりやよけきて父母れ子と云ふ
氣凌潔り相當と父の心先傳りま子の
かたたて家と傳へさ事とまそとねりま
母の耐りわさむる世のそ母くわくあふ
頼たれも甚深の理り及いそ何王仁の縁
無て下れ為とかなる宋女の地りりのり
危りく一國れ事なりと上人の心とたひと
あくといふり次第よ道ひろく世のそ
事とまり

うもく奇れは六なり。おと定は事は
法なりと義と出でて行と教よひるはまり

夜の奇めも
かくと何るゆき

五和奇れ六義の理なり行りかりといふり
わくも是義辨なり

それむされいとい母れそ奇りそ奇れも
てあつれと凡の物りなれとんゆり
物りよそへてんもるかりそ奇り声
ととりそれまよそつらふたかきや
日風かり凡の教なり凡の勸之教の地
物席日上凡北下下凡刺上
化凡刺皆備時不付也き
まる事とあふいそり凡北凡刺共
凡一草木かひくたへる

たがりしきれは門とそく身れお奇よよそへもて
難波はよ嘆やこの苑 米り泣と け奇風

おしくかかるとるなり泣中も子細か記かり
因持れ六義中は終て義わりて或は経律也
いひ或は新用也なかりとるをり凡中て
具と具とるをわりて極とあり中朝よ
美なり又義通とる統わり

くつひおはのかそ奇 わり事とそ地よふそへ
いふおをそととるりわとと 二日賊と量と
稱之又補ととこなりへそるやうふと量ハ
かそへん同之稱も量のふと同しや又云稱

そはともふんときとらむる庭がかり

九段のし記わきと云かり草木禽獸乃

事とわきそ会事とあり 竹第一園の凡

竹よ白蔽帯耳棠勿需勿茂呂伯不菱

菱草 凡の竹ありて賊なり

嘆然とたひはくはれわらきかそ力よつるのさ
のらもあしとて 苑と力ととわそへわりて

よりのかり力よつるのさのさゆいさ

事れかりつるさとととやあり苑よ食

て時日とつる力よつるのさのさ事あり

さともそなる事とつるのさのさ事あり

古今抄卷一
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
類をたぐり失しとふゆるを懼る

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に
あまはれをたぐりしあかりはひ方し并に

子らあれおれふこのまもりのせきしん
 妹らわしとして、あうかゝるやされはなかな
 なるん い奇れ歎よくおれりたる
 めのちやいふこゝちいふためかりうこのまもり
 こゝりきるるさ中これゆゝたがはるか心
 きてそれとく妹よあはすておがはるか
 うかり又い養在深園かこゝろ人とおれ
 へりたふふあゝやき若けこの奇も比
 母はあゝあり

弟三碩人第曰碩人其傾又平如柔英膚如
 凝脂頰如暎齒如執犀膝首蛾眉之毛凡

あてはかり

よの母はたとへ奇 具かりはあゝは具
 ほかかりおの具とわしてよひおして懐
 かされきるかりかひこま事かやとわらへ
 いたしとしてたくとみくろかり極於媚
 諛也きくと直よかひる事なむい
 一知きるとともあかり漢の之儒い
 な具乃字と側声ととたたるんかり
 儒ハ平声とと起と用ありお詮んとおす
 こゝりたふふあゝやき若けこの奇も比
 畢竟同意なり

杯具^{カケ}凡^ヤは物^{モノ}と然^{シテ}る凡^ニは凡^ニ刺^スとる^{コト}も
以^テらる^{コト}も具^ナけし^テも^亦一^ノ又^ハ具^ハ物^ト
也^ト政^トと^ハ何^レも^ハ心^もも^多く^カれ^トも^モ
之^ハお^りく^りキ^テた^る亦^ハ免^カれ^ルコ^トも
具^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
具^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと

我^レ燕^ハ心^もも^多く^カれ^トも^モ
く^トも^モ世^ノ舟^トと^ハ心^もも^多く^カれ^トも^モ
具^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと

凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと

凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと

凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと

凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと
凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと^ハ凡^トと^ハ物^トと

奇とてかうねて入平らるんがり

浪の巻れ赤が厚く松風とて見おらんぬ方
たなひひさひかり 秋なりよこれかかるといふを

たとへをさるがりのかきまてらたへかりて人奇
しるは又とありわらふよんえの奇なり

具よりとわかれしむおちあさ方もさきと

まじ風が外物より流し具も外物よりまじ
を類をさかたり凡のまじく深き之具の

凡のまじく後しは具もわらわらかりこの
免別段可思唯まき第一固睡詩一固し睡
鴻在于河別第五洪澳行よ瞻彼洪澳

銀竹得く 是凡めて具かり

い流りてまき奇 雅かち雅は正素心

をまきしとさかり政とまきしとまき素あま

らうかちまき淳素れんもまき雅は絨より

まきまきなれとと絨の政の善悪とわさく

の奇り雅の政とまきしとわらわらふまき

流りのかれ世かりせむらり人の別れ始り

は奇の雅よりわらわらるる

是はこれとのありたり死とては奇の心

うふ叶いも雅の新と注する詞あり

とめ奇とていふらん 正よわらわらしとまき

かゝるにいふの如く推ふわつとていふ奇
こはの雲介やのうとときとあそととこびる極
糸のち家れ注周

山極あくもそ又ととつる花敷くも凡そぬ世よ

推奇の云中しくわるとい奇の能者あよ

注とゆよの正推愛推すくなり愛推の改の

疾そしるむかり又の大推小推わり

第十六大推注 文王在上於昭于天 在在民志

周雅舊邦其命維新 是大推新也先推よ

して凡新と通たり 第九小推注よ吻く鹿

鳴食野の非

びり丹はよの弁頌の音かり誦の音は王者の

感述とかさなりあしてはびるかり誦いふのあ

くはかりいふかりかびるんかり頌の注の家

音めく誦して非よ若とと世とがうく非

くはくはかりいふはこみんかり

あはあひびくもさんたり候くこのうけを言んよん

はくわせり 由さ兼ハ松木れ失名之家乃極

名といふ統るも言んよんハ極まとのわがま

海かりのよ草れえんうそ言んよんよん

あれ世と海うく非くはかり 頌のんといふ

執かり

かすり燈のりか摘はくちの代とてふふい計とある
せん けい奇しくわさかり頌のふゆ極かり又い
敷の奇も頌りしかかかへ一統れん此よえれ外
告るふもよれはくしと

第十九周頌法廣法 法廟紀文是

於禊法廟南難顯相

北がくもびく内わつまんとはえらまう現にいん
い流まけ奇も六義よまれまうはくまへうとせと
費之注之曲流の義かり又統六義よくく分別せ
び事いわりわん事事かりとまき小注の作者の
ふりやは後費之とていへるうかれいも多しなり

未用之かりが費之わふたたあつたかり又た
と後人の注かりた難分別のうへ早下の心かり
るりれいともわりまへうと極る三条の家へは統
の之指ともさく理よん人もまきまを極と極と
名用之かり但費之も道して事細くまへとま
又かよおせる六義の奇も費之わやまわりとる
母はまへうとも聖人化して賢人法とてい事
わさハ大庭と出とのこかへ一後まうてもおさ
あつる奇と注せん事費之のふもまきまへう
ゆり理かり凡六義のけまも改のためかりとてい
事一奇の乃上右の教儀の端より花も凡

月の舟目よりむい家のころはまうとせと
治め力とていへし道なり六義の中一雅と執と
ふ事とていへしきつと中ととも理なり周の思
たに邦と目みかたり畢竟は徳と肝心とと
流のふかりた義と決才とていへし理を和奇と
美あり

今の世中よりいへしきんれん義と奇なり
かの奇とていへし事のいへしきんれん義と奇なり
ひのまはれんれぬ事とかりてはゆかりおよ
しと記がよるよきとていへしとかりあり
かひんたりとていへし人れんとていへし

救滅の道とも月ねつらる事とまりは
乃事とていへんため今世の事とていへ
柳舟の道は園の風俗とて世にまた
り持統文きの内府人丸君長合神めて盛
かりとていへし策理世極民の道とていへ
の世にまたいへし義とたかりて古の
月事とていへしとかり巧ま令と鮮美仁の
心かりとていへしと道とたかりとていへ
とていへんためあり
わいかり奇とていへし美かりぬかり
とていへし事とていへし思慮とかりとていへ

奇もしくれにあり

久あれこの家もは埋木れ人きれぬとてかりて

埋木れ人きれぬとてん杭網がらある人かて

かりと久好の家よはは乃の実がら事と志す

ありぬとかり

海の方る所母は花と記がし事とへん母もわも

かりよ事より 実がら所母は又実のこりて和

ふさかやかりは道花実流きしうけて

そと海かると質勝文則野がらとつら

あし花す記は海よ出とへんととんため

又洗海がら所母は実がら人わざとては時

き別々しきとらかてまふく甚て懐は

み後がら

それとめとたり人うはへもかかんあぬ

上右の来代はれ門は道と月か事今世の

おとかりとれとあれ代はの門と

いふちる代近喜の事とあめたりとむい

のこまははとありかはへもかかんわ

らぬあへの代はの門やはくくもむあり

えうはへもかかんあぬとてんこもむあり

いふれこの門はの流れ朝秋の月れよと

きやぬ人こりてあしははけり奇とた

てまらじゆ流 秋の月れ秋とよはひありあ
流用之すあり但と記字れやうおん人
一もやうふれ実あり毎夜と月家流る
とまご不問之

さゆふ人い 凶長あしかり

あつた死とうをてたりか記而し海とひわるは
月とたりあてくあふかたをなとれく
とん流て 死とうをたはあつんかりは長上吉
ち道の神かり

さゆふ流ふおもとるうりうらん 長の心と

えるも志流めと事 難敷のれと奇と事

俗人のさゆくともりし流のうへびきたる
類とかなす人 徳人又あひかり人 死と為
あふもたひひしぬおと思ひ八月と賞と
俗よもめあらしあの外とのもたひひなる
色横入る情かり道れんかあはと御音
あもは理あつ人 死とて人れ賢道な
志流しあしとかりあつる代の振とつるし
奇人れ情欲とてれ事とて批とらめと死
月り對してとあ一念くれ衆とて十人
きかりも流あふも國とてと學士のか
アそ流賊と試事とて官職とあ門と

みか利

あらわらぬこころつとぬれられたる人けつと
ゆりかけて君と神のひのけりて死せその
あこころいなり

あらわらぬこころつとぬれられたる人けつと志
海一めそのこころつとぬれまたつとつりあり
物とつと心をつとぬれまたつとぬれまたつと
人の振かり

ほご山 とれますつとぬれまたつとぬれまたつと
されりり 弟みかば集りつとぬれまたつと
と弁れ事と云丹はあつと

君と神のひとは 子年方代と神のふんこ

あつとあつとあつとあつと 君れ代と神の陸つと
とれつとあつとあつとあつと

きこのひ たれつとあつとあつと

うれつとあつとあつとあつと 人とおの松じれ
ねり友と志のひ 人とあつとあつとあつと
か記つとあつとあつとあつと

松じれねり へれつとあつとあつとあつと
おと對つとあつとあつとあつと
のこあつとあつとあつとあつと
まつとあつとあつとあつと

高砂千丸の江れ松もあひたひのやうなはれ
たりひとひともひかりやうなとわひたひ
無お返かり山は海の名前と對する
平等なりなりなり名来とあひする
奇人れん物よよせと花ひとの
かり下丁五丈を押流し

江れと福の舟も奇といひてそなくさめなほ
男山の女は紀墓の上より生る事
流と廻道なり我もひいさるんわ
あしりしとめとさるんさるん自

冬物あれがかりたておれひとたりを
やことまのなかりおれは人ひとた
中れ白事と昨日の義なりぬい
ふかり女は紀の二時とらひと
と舞まらんと假合をきか
きまらふも舞をらふと福とはは
ふるさむびくふも二時そかといひ
きまらふと女うしとてきり又
とをかへとこの文章は對なり男
かりびとたひのそくまは
と一時のさるひと

高砂千丸の江れ松

うと歎けたりおの古奇とともおの
とも遊してこの理とかくさむるなり是奇
人の法かたへしゆれ石なりたへはくとも山
りかけておのるる中法奇人れは海か利
早亮して二時とくこのよりと書かあり

又まは朝より花のちるとは秋の夕ぐれよのこれ
流るる事又まは昔の事お射して世れと
口とま細りてはかたり花のちるとはとま
うと燈月と引ておのるるまておみかへ集の
中此奇とておのりまてうと自面は世の夜と
ふかり飛た流るる事とては誰の常任れ

おのひとまうんと歎けらるなり

あるは年あまにか見れけおんゆら雪と波
ことかけき おのれやうかありかたもたむ
おのけりたのひへき方もお記力と歎と

あか利

草の露水れおと見てお記力とたてはる
きことまの程が記事とてまへおのり
あるは昨日はあふとてしつとてうとまひせり
りひはかりしとておくなり 盛者必衰

の理とたよりよまてうのりかたもたむ
かたもたむかたもたむ歎へきまもあふぬ

あつたかり

松光のときり

は世後世を築き中

いづくのうらふ家事とありふかり

燈の中れ水ととも とせぬことある人こそ

じのあつたかりうさうりし人れ又むりまう

を方らふ事と世間のなりひなりみおせれ

中の板かり

秋萩の下葉と成う先 ら流るふ草とよ

はらとく結わぬれ物なればかりとさこそ

こねのひあかりと秋とくかふかり

あつたかひの羽うたふかそく あつたの教

の流るりのとをく秋の事とねひて人

眠き世とかりなり

うれしはうたういとよみよ うれしはうとよ

あつたかりうらふこととありひのつありふかり

うらとひきと世中とねと ねとかり

枝とくはいと秋やえもととあつたかり

を世中とねとよとありふかり

とつたかりとありふかりとありふかり

あつたかりとありふかりとありふかり

あつたかりとありふかりとありふかり

あつたかりとありふかりとありふかり

キツルニ

る時はきまられたりひた死時いたるゆゑうよ
よそにありひかむ今に後々ありあふ所よあ
精人のねりひりくくん極ちく決ちたりん此
ねりひの果めたり事たり終りたりされん
さ死うこまうありたりんれまうひりたり
まふかり

那うれまうとほくはかりの造りたるも
今の他家なれん古よりなれんよもかゝりぬ
龍潜の跡ありて盡し終りては

キリ人口
奇ふれんそんとなんさるる　　カありんも

ねりひかゝるまめいさぬり奇なりてんを

さむらうかむねんまひかたはかゝるまめいさ
ねんと煙指のさ世間のねりひとなんはめう
きまは奇なりてかゝるまめいさ奇なりぬ
かたねと胸中へ他世と物なれんあひの
ねりひと奇なりてさむらうなるまめいさ一説云上れ網
ねんまひかゝるといふまめいさねりひと奇なりぬ
さむらうのさむらうねりひと奇なりぬ
まめいさかゝるまめいさねりひと奇なりぬ
まめいさかゝるまめいさねりひと奇なりぬ
まめいさかゝるまめいさねりひと奇なりぬ
まめいさかゝるまめいさねりひと奇なりぬ

足柄部三石の御二系家冷泉家各別
かり冷泉家より不立の義と月標れくさ
続ハれりひとかくさめういさくを標と此家
本家の家おき一後不立不立のよはにさく
口傳わりとききとそを置上れりありのそこ
あともあり舟の万葉中よりあつちやえ
は集母もねのひとけひのりしうろくかろこよ
神よりさるぬきあり序より大略帝の心と
そそはあかり尤支體する人さるや

いあへもさくつりうら母もたし此の時の
いあへもさくつり かくれ此の文成天皇 京極黄門

紫の此の門事古來難義とよ 或平城 大同天子
乃此の門と一是の龍翻まそ十代と勅命す
説かり一顯昭等月比義まそ人丸合神の時
りお遠まそ又万葉被撰代にあす或人云
顯昭かやい説と月事不審こ不別
ありさあやとまそ其名序より平城天子と
まそは高流母はかくれ此の門とよむかり或の
かす此の門とよ屋武の此事とまそ万葉を
撰治一此の門がれりや大方屋武此の事と
心はゆりかそ七代の元明和洞三年よ和別
の城より後甲治より先仁まそ七代かり

桓武よけ系り遷都ありさ聖武を
かゝれ此門とP七代の中母も地よあ
かゝれ此門もく佛はとも眞澄もく
東寺此建立あり奇道又感かり一れよ
れ分て稱しなり来るかり万葉集と
えられ一時の極り一とされい聖武の
事とかりれ此門とすきると凡山法とも
尚流不用之は事は傳ふ一と多し
流りかりれ此門と文武と月法は元明の
前一代かりれ准しての義は元流かり
私文武用素良宮而歸後原宮新ま用

素良宮素良宮 後常慈寺殿住

彼おのんや
三の心代
多りん

多ありあ事とかりと号する理に假令ま
事と月法代かり神とと神代かりとあ
尚流不用之

おのんを記しりたはさののらわかされりとの
人丸かん ねはさのの位正之位かり柳中姓

かり人丸文武此帝師りて君長合神れ
の奇聖之聖武の正時とPかり一れよ
文武帝と記せしゆ龍田川の行幸の時
にかりの奇と人丸法事とも人丸持
統しり聖武もそ又代り法へ一人といり

あつねども帝師として尤奇道感かゝり
事い文武れは字かゝるへ素良け清門と
俊成の古本風抄より望武のは事から大
佛坐の清門とまゝい事定家のあふりお
坐をりゆにこれ地をてかたより一りさんま
定家のあふりへへへて父子かゝり心あつるや
ありに京大やうあして黄門に抄んらうか
事ありき後海の池とてりさもこり神こ
事定家とと人丸のよるへとらふ事力義あり
見くよとていんとき

奇の聖なり
これをも君も人も
身ゆりもををり
こゝろある白

秋のゆへ龍田川りかゝる紅敷とけはみくとん

おのりよあきと見給ひ 文武龍田川行

章のつれ御製なり

去れわさう一燈の山れ極へ丸え丹は雲うとの
かんたぬくさる ながりさ行章の四人丸こむるの
ありあつねれつるしの奇と前と御とを奇の
事とないんときとてう一燈の山れ極と出せり
まゝに秋のゆへ龍田川とすかゝり射してまの
わさう一燈の山れつるしの文章れかゝり
人丸の奇母が記事事からい奇の事切御
ありとまゝに文章れ射してまゆんおり
ゆへまゝに文章なり

又山莊への赤人といふ人わり々り

紫良れ門

人丸赤人三人の事といふ人丸赤人同四

赤人いともあしき人丸万葉の末は人丸

の舟見えし赤人のいともあしきあり

舟よりあやしくたへかり々

舟奴に赤人

の舟の自給めてあしきと跡きああり人丸

れ泳の環のそかりたうあしき

人丸赤人いともあしき人丸とあしき赤人い人丸

ありりた人いともあしき人丸あり々

畢竟赤人のいともあしき流用之或流人丸

赤人いともあしきいともあしきいともあしき

そも赤同れあかりいともあしきいともあしき

のかさりおれ

龍田川のみらしたおらあ

秋の部はは

梅の花をいともあしき

冬に部ふあり

いのかとあしき

換の部はは

いのかとあしきいともあしきいともあしき

一秋にり々

遊のいかりはは

いのかとあしきいともあしきいともあしき

いのかとあしきいともあしきいともあしき

いのかとあしきいともあしきいともあしき

いのかとあしきいともあしきいともあしき

厚のたしあふやと又いふ方と見ゆ流あり
尚流もよみあはれし中ふ深の心も
わろくかたかたはるは流くともかたわ
まへ鳴り振あり

おれ人こそきて又よみん事なる人もられ行乃
よろくかたかたはるは流くともかたわ
ありなほ 紫良れ沖門の事ゆはあふ人

かゝも人丸赤人ぬ人れ外ありとまり
先「わははらの弁とわのめくかん万葉集也
名付くまてりくる ちさ不審味没ま
道家乃流くされとは古今集よむ人の

ふりや万葉わのれ一事「万葉撰ハ唯
武紀が「尚流也ももかたり

あふいあ「れ事とも弁のふととれ人
りゆふいごりゆりかたりき 丸赤人れ「ち

ほひの人とらふ「や次の観「これ世時「は
か「ああり「あれ人「れ事とも又「遍
おれ人れ事とも

あつあつ「あれ「ま「は「あ「ひかんあ
よれく「あ「れ「流「あ「か

か「は「あ「あ「れ「年「あ「あ「あ「あ
あ「あ「あ「あ「あ「あ「あ「あ「あ

五皇御宇にてもやまかたへ一万余撰
られし御所りの振りてとてこれと志る
るうくと文武も醜醜よりつり延喜及び
十九代二百余年かり終る大教と云り計こ
文の辨かるへ一表流用は大同天子もい
拾代百年よりあつたは時人九ある今守
臣武より十六代百七十年かり冷泉家より
継神の決事とのんて十代も用は恒別紙
は事代に可有口改年
いあしれ事ども舟とも志まる人よむ人にが
の守 けは又上北綱万葉抄事流るるへ

とせむらひ

い海之事とすよ 貴之批判と序ふと今とつり
うれととらう世にといふ貴之とと貴の遍昭
おの事かり

△
いかに思ひ
をゆふ名同
をらふたををれ
をあり。

けららり升たり人とはをりて記るうかれ
りれと△ま位の人れ舟と批判斟酌あるべき
対傍の強かり貴之の意を適ありたり久き
事とせ
備心遍昭の舟れは海をえんをも由とすか
とあり一実かりふかといふとと細んそのかり
をる舟かりへ一後鳥羽院上皇定家よけ

交れ事とほあり〜お遍照と峯の
 れまは内使のわらん母と侍られお
 定家ていけのそれと弁べんはP侍と養やしせられ
 Pときき弁道の故実が〜と世
 大いふ〜ひあ〜とていほ〜と
 う〜と〜
 の〜女よ〜の極
 わらみらり〜白しろ〜
 雲の柳うゑのやなぎ
 ちら〜葉はれおありお志し〜とてかおは
 とお〜わ〜

前まへ〜は〜とあ〜とわ〜と〜と
 と玉たまとあ〜と〜と上うへ〜と
 ち〜と〜と〜と
 かの〜馬うま〜と〜と
 て弁道べんどうと〜と〜と
 海馬うまの〜と〜と
 在原わらひが〜と〜と
 弁と〜と〜と
 帝みかどの余情よせい〜と〜と
 志しが〜と〜と
 詞ことばの〜と〜と

孩まらるとはなれわまらるる一々智者堪
 能るやの調もくが死をくひかろへ一
 かついひさうき一て孩はゆるあくこ
 調はゆるその志れもくがこもり
 云とそくかんあして文とくすう仁ある事
 せくか一さうふと一奇道の肝心なり
 可思道と地
 月をわぬまや者の其方一我力ひと心
 の力あて 前一はせ
 ねんいねとまて一老をいけりまじ人の老と
 かりもの 中ねれ奇よれ一既とる泳かり

いちしつきの
 ようはこ思き
 くるんか
 #

ぬんあやとひてハ調をく見あくそれさ海力
 りたせと ねり海さあをくねぬよたとく
 ちりりんうとあ一御さああると商人
 たとくちろかり
 吹くよ野を本れ茶本れ茶本れ山風とわしと
 いみん 秋れ部よ秋の茶本とあり中いあへ
 のよあるかり
 源草れ門れ園忌よねんさた讀とま
 ちあつき處の岩よ新くして何日のくれ一を
 ちいわぬ ちろかんあして余情ありと地
 は席一しりをる奇いあくくを批判の

おとくかへらるもわらへ

宇治山に備きせんい願ひあはしてん
きしうかへしといふ秋の月とらるよわらへ
くも
くも
くも

秋が秋のきよいさうそ位に秋うらやまへ
はまの白人のくもとわらへきよとよめ
おとあ一物れきうらやうがり始終きう
かへぬさ海がり晴るれ月う曉る一丘の雲
のさへさうしたとくへり又まは弁の秋とあま
ねがはるかたんと月と雲るよかんよたな
あかりぬ流もんかあへ

よ地内弁おひくやそ縁のきあれよかやう
てしうとあへそ 一首ねにわきごとおひく

きあへしとせりふ文章
小室小町におあへそをけり娘の流ひかり
わられかたやうあへはようきとてくし死
と一かたのさやうらあわらあきなり

そ流とよふと又きうひとしむ説わりな
うれとけ續へしとそさうれあはらうと
六人の中一小町に難のなうさおわははよか
あぬの女れ弁かたれとてあり
おとくはわらへや人れとけりん愛とありせ

はよかへんを
女のそりあは
あへ

さめあしきまじりと 奇のふかきしほ
そをゆり根れうた 奇れ根の支流しきり
我せこうくへき宵かりさうふの殊れふるまひ
福くまうしも け奇右風の急うかれば
登うくくまも此所もあるやとまじ

大津のく流りくその極いやしくしたき
おへ山人れ死のけりくやとちるうき
奇れは油とくくおしくおさうまじ
おひあきあきしつ初層の鳴てくるく人は
あまもや 人のまじくもやいなるおれは油やし
まかりぬれ部よん人あうまやとわため

てんきり

か見山いまよりててゆん年へめるかお
御一わらや 心氣なる奇かたうくまじ
いあまくんでゆんといあるおまじくやし
まじやかん
柀六人れ奇の矢とくよよ流まは奇とか
とててまやなうそん人丸とかうて矢と
まじへまかり人丸の他い第一もんかまじり
かく氣氣又殊勝こしともの流くまじり
のかり建立をくみ環のくくしては
たうかよかとまじるなるく

世に人こそ名をいひて世に名をいふはあつるうらの
まはむいふはありまや一かきけいふはまはれものこと
まはりかたれと奇とのまはりひてその様
あつるあつる

前よりある人れははひもまはれの人となり
奇人かほやまとも奇とまはれものこと
て教戒の道まらふとまはれし上れ親よと
の世れ中へまらふまはれしつらふおあつるまらり
かたれしつらふたのおあつるのまはれまはれ
まらふのつらふれまらふまらふまらふ
まらふれまはれまはれまはれまはれ

常^子母はまらふまらふても可^い親^之 寛^元年九

年受^よ禱^{ひん}まらふまらふとまらふまらふ
九ヶ年かたりまらふ道とまらふまらふ
まらふのつらふれまらふのつらふれ
まらふのつらふれまらふのつらふれ
まらふのつらふれまらふのつらふれ

おはれまらふまらふまらふまらふ
まらふまらふまらふまらふまらふ
まらふまらふまらふまらふまらふ
まらふまらふまらふまらふまらふ
まらふまらふまらふまらふまらふ
まらふまらふまらふまらふまらふ
まらふまらふまらふまらふまらふ
まらふまらふまらふまらふまらふ

の聲もびへし海河のま門の事と云
あつたといふ海難云万機之余難法事
のあまりとわり志うし奇乃ハ教戒乃
と云と云つりかかると云 答云奇乃
比かおと云と政とのつりわると政の
助業なり政道云為の時よつりて一奇と
政のつりりよと友つりてつり余力
則ハ受交といふとつりかへしは問答
一法の理ハ法席の心は君が海河の事を
と云と云し海はあなり一奇道と云
あつたといふ海河なり又と云く奇ハ法

乃ハ法なり法ハ政の名なりといふ
あつたといふと云かお事と云と政といふ
まつり一也と仁法の心と政のつりかへし
と云と云と政といふ中一奇乃あつて余
一法ハ一集とあつた法ハ事と云と云
あつたといふかへし一集と云と云と云
事といふかへし一法
あつたといふ事と云と云一法と云と云と云
あつたといふと云と云と云一法と云と云と云
はつたといふ 神代といふ法文武人あつ
の事と云と云と云一の心と云と云と云と云

大内記紀要別
 所書の所のあ
 けりて記費
 之を記のひの
 之を記のひの
 内所恒存つ
 之を記のひの
 忠孝奉ら小位
 之を記のひの

古今抄卷一
 四十一
 と可集うりて撰集もろしともみされ
 一々代は湯人のみならず後代もその為
 延喜又平賀月十八日よ。慶湯人の時よあり
 事のみめと記せり所書所のあり
 ありあふいれきし官 ころんとむ
 可集うりてぬあさき奇 け集うり可集の
 奇のへきもありそれい家集とて撰
 入られきさうかへ一延喜は法もてい可集の
 くりかきさうかへ一や村上のい時よ源順と
 加へり世にもまぐるとかん
 ありてのともたてまじりめ撰てらん撰者のい

自筆と名は事なり其の奇のあり
 此とみか初定とまき
 せれうかふ抄と名は事なり其の奇のあり
 紅葉とわり雷と名は事なり其の奇のあり
 部立の振いと言季なり
 又書りありてはくく君と名は事なり其の奇のあり
 候が利
 秋萩の白葉と名は事なり其の奇のあり
 わら坂山と名は事なり其の奇のあり
 藤等と名は事なり其の奇のあり
 長夏秋と名は事なり其の奇のあり

あらむ

えらるる世経ふ致

雜弁以下 雜祈等の部

十之千身
名付

古今和歌集と云ふ

去名序續万葉集と

撰集の両は之集の号とかりし名付るもの

もこそ後りやとま首尾して古しと号

せしかりへ古今れ二字の事才一書よ

ほせと

かこのまひあひあえつられて 山下水のこ

と次弟より流りりてりおも後へしもの

に監錫よりたつるふかり

よしのまよこの敷たぬく は集れ余首

このほり成統のふかり

とあまの川の瀬から流もやえと

せれ変化ありとては集不爰ありて限り

もへしとていれぬ

あれ石のよかとかたの海にひのこそあるま

物爰にたかく次中へ増長して万代不窮なる

るる理かり先とて海ありとて世代

貴くは道のほやして合祈の撰集がれし

それまろしとて 巨等詞かり貴くは後集と

とつらとていし

春の花れかひすくなく 詞のあかひもくた

きうし早下なりまの苑ハ海の潮

ひきし記名れ秋の萩かう記さうこてれ

さうれき名をひとあそくさうん事と歌

わがし丹ふたそりり門の舟のふよさうらふと

未練の男と早下ー又は集と撰とく事

のふさうらさう

たかひく雲のき花井なくされたさうーの英

あり世うーたなくむじまれてさうとれ時一わ

とたんと海こひわ 起居勅辭は事とよ

海あふかり歴代よむじまれて撰は集事

人ま海なくなりやこれと舟のことさうれあれ

文王已没文不在下茲のふとりて事さうり當代

ゆりさうらわりそれも人丸の余甚余風から

人死とか然うりりよふよあさうと院一先

柿がきと舟れとさうまれあれとよ朝

あう人ー海あふん

さうらひ雨うりとりりそれーひかなーひひふ

やも△世れ家樂変化ありとさうし舟の文字た

えとあう人ーこれ

鳥のわやひさうさうまねふ されーひ

かなーひひさうやもい舟の凡さうさうら

のふかりまの海とさう集一さう一遊

此等の文字ア
ルヤヤ音初
ちとれ初の音
ちりさうら
正木のつら
くはさうら

奇れい海とく

奇道の死実等相具

一、奇道の海等とく、奇道の死実等相具

あざれんてえとらん人の 一、道と教れをよ

かる理とんえん人かた利

大それたことらうとくふ 奇道にれんのか

みを照と事なり大それたことらうとくふ

人くまひんくわとるんあふきとれり

文選序 与日月俱懸 照日月深鬼神のま

いあしとあふきとらひひうとれんこと

天地殊分以来二神素戔為尊等 文武天

皇人たりの道とあつへー今といふ代を

とらり延喜の沖門費之し時とあひあふとらあや

とれり撰並られ集なれかろへーは初古今

の二字とりて事換はかり

人

人

古今類考卷一

四十八

古今類考卷一
四十八

